

まだ三月だというのに、リュックサックを背負った背中が汗ばんでいる。鈴木一郎は、首に巻いたタオルで額から流れる汗をぬぐった。長岳寺の境内からは初夏を思わせるような青空に浮かぶ綿雲が輝いて見えて、文字通りの陽光は休耕して色を失った田に蓮華の赤を一面に映し出していった。

鈴木一郎と山本康文、佐藤三郎、山田花子の四人は大学の歴史サークルのメンバーで、古代日本史を研究のテーマにしており、この日は奈良県の山の辺の道を訪れていた。

山の辺の道は、日本書紀や万葉集にもその名が残る日本最古と言われる古道で、天理市の石上神宮から北方の円照寺方面へ辿る北コースと、それとは逆に南方の大神社まで辿る南コースがある。一般的に山野辺の道というときには南コースを指すことが多い。舗装されていない道も多いもの、地元の野菜や果物を無人で販売する所があったり、近年はウォーキングコースとしても整備が進んでいる。老若男女を問わず人気を集めている。

四人が歩いている南コースは、石上神宮から大神神社までのおよそ十六キロ、崇神天皇陵や景行天皇陵といった天皇陵をはじめ、壱山古墳や東・西乗鞍古墳、西殿塚古墳（衾田陵）などの多くの古墳がある他、竹之内環濠集落や夜都伎神社、いま四人がいる真言宗長岳寺など日本の古代史ファンとしては見逃せない見所も多い。もちろん、スタート、もしくはゴールとなる大神神社や石上神宮も歴史的に重要な神社神宮である。四人が山の辺の道を歩いてみようと思画したのも、日本の古代史を研究する上で、こうした史跡を見ようと思汗をぬぐいながら、一郎は石上神宮から長岳寺までの会話を思い出していた。

四人が集合したのは石上神宮。

石上神宮の境内は、それほど広くない。拝殿前を囲む回廊の朱い柱はどこか春日大社の回廊を思い起こさせる。しかし朱を排除した楼門はその重厚感を際立たせ、さらに拝殿の茅葺き屋根とやや色あせた朱柱が、社が背負った様々な運命を物語っているようにさえ感じさせる。

一郎はそんな石上神社の佇まいが好きだ。物部氏の氏寺。きっと日本の古代史に重要な役割を果たしてきたに違いないと一郎は確信していた。

一郎が石上神社に着いたとき、一番年下で神社が大好きな佐藤が、まさに自分の出番とばかりに石上神宮の由緒について話し始めてい

た。
「石上神宮は、第十代崇神天皇のときに創建されたと伝えられている。今日これから行く大神神社もそうですけれど、日本で最も古い神社の一つと言われている山野辺の道沿いに崇神天皇陵があるんですよ。山野辺の道から見られる天皇陵としては一番大きいよね」
山田花子が続く。花子は天皇陵や古墳に興味がない。
「もう一つ、石上神宮は物部氏の寺だと言われている、祀られている神様もそれに関係しているんです」
「石上神宮の神様は、布都御魂大神（ふつみたまのおおかみ）、布留御魂大神（ふるのみたまのおおかみ）、布都斯魂大神（ふつしみたまのおおかみ）です」
「なんだか、みんな似たような名前じゃありませんか」
「そうですね。神様の名前よりも、こういうのはどうですか」
「なに？」
「石上神宮は物部氏の寺ということなんです。物部氏は武術に長けていたと言われている、大和朝廷でも武力の物部と財政の藤原と言われている、権力争いをしてたとか」
「ふうん、そうなんだ」
「それで、神様の名前よりも、なに？」
「石上神宮の神様は剣（つるぎ）に関係しているんです。一つ目は、神武天皇の東征の時に神武天皇の窮地を救ったとされている剣」
「あ、それ聞いたことがある。たしか」
「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」
山本が口を挟む。
「そう、それそれ」
「山本先輩、さすがですね」
「まあね」
「一つ目は、天叢雲剣ね。あと二つは？」
「二つ目は、天璽十種瑞宝（あまつしるしとくさのみづのたから）」
「なんですって？」
「あまつしるしとくさの、みづのたから」
「もう、神様の名前とか、この時代の呼び名って面倒くさすぎ！」
花子が、みんなが思ってたけど言えなかったことを、いとも簡単に口にされた。
佐藤が苦笑いしながら続ける。
「ですよね。これでも一生懸命に覚えたんですよ。で、これは剣と、いうよりは十種類の宝物で、中には八握剣（やつかのつるぎ）って、玉剣もあるんですけれど、死んだ人を生き返えらせる力を持っている玉

とかもありません。全部で十種類あるんで、十種類の神様の宝物という
ことので「十種神宝（とくさのかんだら）」ってもうみたいですね。

「鏡もあつたよね」

「それまでダンマリを決め込んでいた一郎が言う。

「さすが、一郎先輩。瀛津鏡（おきつかがみ）と辺津鏡（へつかがみ）の二つあります」

「いや、これを覚えていることに敬意を表するよ」

「でも、なんだか剣に玉に鏡でしよう。三種の神器とは違うの？」

「三種の神器は、草薙剣（くさなぎのつるぎ）、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）、八咫の鏡（やたのかがみ）だね」

一郎が答える。

「草薙剣と天叢雲剣は違うの？」

「それは、最後の剣の話をしてからの方がいいんじゃないか」

一郎が佐藤を促す。

「はい。じゃあ、三つ目の剣ですけど、これが十握剣（とつかのつるぎ）っていいいます」

「あれっ？さつき出なかった？」

「そうくると思いました。さつきのは、八握剣。今のは十握剣」

「八握剣と十握剣ねえ、八と十と何が違うの？」

「えっと、それは：」

佐藤が救いを求めるように、山本を見る。

「握は長さの単位。つまり十握剣の方が二握分長いってことだね」

「ということとは、どっちも長さを表してるだけなのね」

「そういうこと」

「それで、さつきの草薙剣の話はどうなったの」

「順番からいうと、十握剣、草薙剣、天叢雲剣の順番になるんだ」

神話の話になると一郎がめっぽう強い。

「十握剣はスサノオがヤマタノオロチを退治するときに使った剣で、

そのヤマタノオロチから出てきたのが草薙剣。天叢雲剣は神武の東征の時に、あわや全滅かという神武の窮地を救ったのが天叢雲剣と

言われている。三種の神器に採用されているのが」

「天叢雲剣ね」

「いや、草薙剣だ」

「どうして？神武の窮地を救ったんでしょ。まさに神器にふさわし

いと思うんだけど」

「どうしてかは、わからないさ。俺が決めたわけじゃない。でも、

天叢雲剣でも、十握剣でもなくて、草薙剣が三種の神器なのかとい

う検討はついてるんだ。いまは、なんとなくだけだね」

「え、なんですか、それ」

興味津々で佐藤が割って入ってくる。

「その話は、また今度」

「先輩、ずるいつす」

「まあまあ、三種の神器なんだから、鏡と玉のことが分かってからの方が、いいと思うよ」

「なんだか、思わせぶりね」

花子も不満たらたらだ。
一郎には、三種の神器に天叢雲剣ではなく、草薙剣が選ばれている理由の見当がついている。一郎が、山の辺の道に興味を持ったのはそのためだ。なにしろ石上神宮と大神神社が共に起点と終点になっている。加えて、途中にある崇神天皇陵と景行天皇陵だ。この二人の天皇は、その実在性も含めて、日本の古代史にとって重要な人物だと一郎は感じていた。

一郎の仮説を検証することは、古事記と日本書紀に書かれていることを検証することには他ならない。それ自体が相当難しい作業になることは最初から明らかだし、もし、一郎の仮説が正しければ、古事記と日本書紀、いわゆるゆる記紀を通して伝えられている日本の古代史がひっくり返ってしまう。おいそれと口にできる話ではなかった。

「日本創成の物語。真実は、どこにあるのだろう」
「観光客が鳴らした長岳寺の鐘の音を合図に山本が呼びかける。

「じゃあ、そろそろ行きませうか」
一行は長岳寺を出て、再び山の辺の道を歩き始めた。
そしてほどなく四人は崇神天皇陵が間近に見える道に差し掛かった。

崇神天皇陵は四人が歩く進行方向の右手に見える。そこには、手前の田んぼから一段上がったところに周りをフェンスに囲まれたキレイに整地された台地があって、その奥にこんもりとした森のような、小さな山のように木々が生い茂っている場所がある。それが崇神天皇陵だ。

「見てみて。これが崇神天皇陵よ。大きいわね」

花子のテンションが一気に上がる。
「崇神天皇って、ヤマト王朝の初代天皇って説もあるし、もしかしたら実在しないって言われている神武天皇のことなんじゃないかっていう説もあるんですよ」
「へえ、さすが詳しいですね」

花子が古墳に詳しいことを知っている佐藤が褒める。気を良くした花子がさらに続ける。

「崇神天皇陵から少し南に行つたところに景行天皇陵があるんだけど、景行天皇って、倭建命（ヤマトタケル）のお父さんって言われているんですよ」

「景行天皇って、たしか！」
山本康文が、何代目の天皇だったかを思い起こしていると
「十二代目の天皇よ。日本書紀によれば、景行天皇自らが九州に遠
征して、熊襲（くまそ）や土蜘蛛を征伐して、東国には息子のヤマ
トタケルを派遣して蝦夷討伐をしたことになって、東国には息子のヤマ
「確かその時に、倭建命は大宮の氷川神社に立ち寄ってます」
佐藤三郎が参戦する。神社関係の話はスルーできない。
「そうね。倭建命ほどの人でも、さすがに東国征伐は荷が重かった
というか、命がけだったのかもしれないわね」
「倭建命は、神武かもしれないぜ」
鈴木一郎が放つ。
（ありあ、はじまっちゃった）
ひそかに、山本康文が頭を抱えた。
「どういうこと？」
三種の神器の話で「おあずけ」を食らった花子が突っかかる。
「一郎が淡々と続ける。」
「ヤマトタケルは景行天皇の息子だと言われているよね」
「そうよ」
「でも実際に景行天皇の後を継いで第十三第天皇になったのは誰だ
っけ」
「ヤマトタケルの兄弟とされる成務天皇よ。成務天皇だって、全国
の国造を整備したりして立派に仕事しているわ」
「でもさ、それは天皇になってからの話だろう。倭建命は父親の景
行天皇から直々に東国征伐を言い渡されて、それを見事にやっ
けた。ギリシャ神話にもあるじゃない。結婚を許してもらうた
メドウーサの首を取ったペルセウスとか。無理難題を押し付けられ
ても、それをクリアする話は、世界中の神話に共通の話だよ。しか
も倭建命は皇位が欲しくて東国征伐に行ったわけじゃない。それ
も見事に成功してるわけだからさ、それだけでも後継にふさわしい
と思うんだ。でも結局倭建命は皇位を継承して遠ざけた可能性も
力を目の当たりにして景行天皇が煙たがって遠ざけた可能性もある
けど、古事記と日本書紀の目的から考えると、倭建命の話は、その
まま読むのはどうかと思うよ。そもそもこの時代の天皇の系譜に
は、多くの学者や研究者が疑問を持っているよ。なあ、山本」
（ここで振るか）
山本は、やれやれと思いつつも
「そうだね、いろんな研究者がいて、それぞれの説があるけど初代
の神武天皇から第九代の開化天皇までは、ほぼ架空の天皇だとす
意見が大勢だよ。そのあとの第十代崇神天皇から第十四代仲哀天皇
までは諸説ある。いると言う人もいれば、そうでないと
言う人もい

「るってこと」

「そのくらのことには、わかってるわよ。だって、一郎が倭建命は神武だとか言い出すから」

「可能性の話をしたままで」

「可能性の話をしても、神武は初代の天皇よ。少なくとも古事記にはそう書かれていて、倭建命は神武から見たら、後の人だし、時代が全然違うのに、それが同一人物みたいじゃないか」

「だから、そこは創作された可能性があるって言うこと。それに、さつき花子だって崇神が神武かもしれないって言うたじゃないか。

崇神は」

「第十代の天皇。もう、言ったわよ。言ったけど、それはそういう研究とかがあるって話で、一郎の倭建命が神武だって言うのとは違うし、そもそも誰がなんのために創作するのよ」

「もちろん、藤原不比等と持統天皇だよ」

「はあ？」

花子がため息をつく。

「確かに、古事記と日本書紀の内容が合わないことくらいは知っているけど、創作とまで言い切っているものなの？」

「いま、日本で一年間に発行される書物ってどのくらいあるか知ってる？」

「は？、いきなり何を」

「山本、どのくらいだっけ？」

(やれやれ。また、俺かよ)

「年間の新刊発行部数って、どのくらいだった？」

「なぜか、山本にはそんなデータが頭に入っていたりする。」

「確か、新刊の発行部数でいうと、だいたい七万五、六千点、販売部数もそのくらいじゃなかったかな」

「毎年だよな？」

「そう、最近では減少傾向だけだね」

「何が言いたいの？」

「質問の意図がわからずに、花子がイラつく。」

「出版部数って、そのくらい多いってこと。これに漫画とか雑誌を

足したら、もっと多くなる。でも日本の古代史について書かれてい

る書物は古事記と日本書紀以外にない。他の資料は一切、現存してい

ないんだ。つまり二冊の書物がずっと日本の古代史の唯一

無二の根拠なんだ。これをどうしておかしいと思わないのか、そ

「うちの方が不思議だ」

「風土記が抜けてるわ」

「風土記は古事記をもとに作られたという説もあるくらいだから、

あてにならない。そもそも古事記や日本書紀は、天武天皇が命じたもので「帝紀」や「旧辞」参考に書かれたと言われている。研究によつても日本書紀も同じ資料から作られていることは、多くの研究者によつて指摘されていることだよ。でも参考にしたと言われている帝紀も国記も現存していない。参考資料が存在しないんだから、中身の検証のしようがないよね。蘇我蝦夷が自害した時に蝦夷の自宅と一緒に燃えてしまったとされている天皇紀や国記だって、その実在は怪しいと思ってる。あつたかもしれないけど、それは多分違うタイトルの書物だった可能性が高い」

「確かに、古事記は物語性が高いとか、日本書紀は記録性が高いとか言われてますよね」

「佐藤がつぶやくように同意する。それを受けて一郎が続ける。『日本書紀の編纂を命じたのは天武天皇で、六八一年（天武天皇十年）のときに川島皇子と忍壁皇子が勅命を受けて編纂が始まったとされているんだ』」

「それは聞いたことがある」

「で、古事記はどうかと言うと、実はよくわかっていない。ただ古事記の内容だね、例えば天皇や皇后の名前や系譜が日本書紀とほぼ一致していることとか、神代の物語や伝説なんかも日本書紀の内容と同じ内容が多いとされていることから、同じ資料を使ったんじゃないかという指摘があるという事なんだ」

「でも、なんだったの。確か古事記は稗田阿礼が誦習したのを太安万侶が書き取って作ったんでしょ。日本書紀は舍人親王が編纂したつて習いましたよ。受験もあつたから、必死でもないけど、一応覚えまして」

「佐藤は、どうしても納得がいかないらしい。」

「僕もそう習ったよ」

「一郎が苦笑いしながら続ける。『僕も、それを証明しながら続ける。』」

「でも、それを証明することができる。』」

「僕らは、教科書に書いてある通りに学校で習って、受験のために必死で覚えた。でも、そんな昔のことを検証して証明することはとても難しいことだよ。資料がたかさんあれば、それを集めて『こうなんじゃないか』って、類推することもある。でも、その古事記と日本書紀自体の信ぴょう性を確かめるって、至難の技だと思わない？』」

「も、日本の考古学や歴史学は、資料至上主義的などころがあつて、何か資料がないと、そんなはずはないと絶対認めないし、資料が出てくるとその資料の信ぴょう性には問題があるとか言つて、なかなか前に進まない。その資料の信ぴょう性の問題があるところでの空論が多誰が見つけたとか、そんな本質とはかけ離れたところでの空論が多

「すぎるような気がしてならないんだ」

「うーん」

「佐藤が黙ってしまった。思うところがあるのかもしれない。」

「それに、古事記なんかは七一一年（和銅四年）まで、手がつけられていなくて、それに気がついた元正天皇が帝紀や国記を稗田阿礼が誦習していたのを太安万侶が書き取って完成させたって言うんだぜ」

「だから、誦習っていうことなの？」

「そう。それにさ、もし六八一年に天武天皇の命があつて、それを七一一年までほっといたとしたら、三十年も何もしなかつたってことになるよ。今の時代だったら、こんなこと許されないし、この頃だつて、獄門・市中引き回しはないかもしれないけど、打ち首はない？」

「獄門、市中引き回しはないかもしれないけど、打ち首はありそうだな」

「山本が相槌を入れる。」

「今まで話した疑問とか問題を一気に解決する方法が一つだけある」

「何、なに」

「一斉に身を乗り出す二人。」

「全部、同じ人がやればいいのさ」

「は？、同じ人？」

「同じ人つて、誰？」

「だから、藤原不比等と持統天皇だよ」

「何言つてるのか全然わかんなくなってきた」

「花子が、呆れを通り越して、ほぼ怒りに近い感情を込めて言った。」

「結局は、古事記も日本書紀も『勝者の歴史』だつていうことなんだよ。その勝者の歴史書、しかもたった二冊しかない資料に書かれて、いることを頭から信用してきたのが、今までの古代史研究の最も大きな問題点だと思うよ」

「一郎が続ける。」

「勝者つて、さつき一郎が言ったみたい藤原不比等と持統天皇が勝者つてこと？」

「そうだよ」

「じゃあ、負けたのは誰？」

「（あり、地雷踏んだっ！）」

「山本が心の叫びをあげた。」

「物部氏と天智天皇だ」

「山本が思わず頭を抱えた。」

「何、言つてるのか、もう、ぜんっぜん！ わかんない」

「もう少し正確に言うのと、広い意味での出雲神族と物部氏一族と中大兄（なかのおおえ）と言うことになる」

のお祭りもそうですし、言われてみれば、いっぱいありますね」

「お盆も神道の行事なの？」

「お盆も本来は神道の行事だったけど、いわゆる冠婚葬祭の『葬』を仏教が受け持つようになったから、仏事みたいになつたと言われ

てます」

「ふーん、なるほどね。それはそれでわかつたわ」

「花子の相槌に満足した一郎が続ける。いまだに教科書で通りの教育をした点には、花子が言うように、いまだに教科書で通り一遍の教育をしていることに繋がっていることだと思ふんだ。古事記に描かれてはいる天皇の實在性の論争に決着がつかないのは、天皇陵の調査をちゃんとしなければならだと思わない？今の技術があれば、何も天皇陵を掘り返さなくたって、そこそこの年代比定くらいはできるはずだよ。自分の国の古代史が、二世紀そこらくらいまでしか遡れないって言うのは、国際的には恥ずかしいことなんじゃないかな」

「それはそうだけど」

「どこかやり込められた感の強い花子は、納得したくない。

「それに、もう一つ不思議なことがある」

「今度は何？」

「再び、花子が戦闘モードのスイッチを入れようとしたその時

「前方後円墳って、どうやって作ったんだろう？」

「一郎の一言に、一同の足が止まる。

「どうやってって、権力者が人を集めて作ったんじゃないですか。ほら、エジプトのピラミッドみたい」

「佐藤が、花子の代わりに答える。先ほどにわか同盟軍を結成して

いた。

「そうじゃなくて、例えばこの景行天皇陵だって、僕らの目線から見たらただのちっちゃい山とか、森くらいにしか見えないう。でも上から見たら、立派な『左右対称の円と四角の組み合わせ』だよ。どうやってここまで正確に測量したんだ？」

「確かに」

「呆氣にとられて二人の代わりに山本が応える。

「崇神天皇陵とか、景行天皇陵くらい規模ならまだしも、仁徳天皇陵とかデカすぎるだろう。直線のできる方墳なら平面測量してで

きるかもしれないけど、円はどうするんだ。空から見ないと全体像がわからない構造物って、ナスカの地上絵と似てないかな？」

「作る前に地上で丸く書いて、そこを掘って、つくるのかな」

「まあ、ナスカの地上絵も平面上で描けると言うけどさ、上空から見ないとその大きさとか、権威を示せないとか言うのは違う目的があるんじゃないかって気がするんだよね。だって、ほら、ただの森だもん。天皇陵」

一郎が指差すままに四人は景行天皇陵を見上げる。

「確かに」

「違う目的って、なんですか」

佐藤が、恐る恐る一郎に尋ねる。

「まあ、慌てない、慌てない」

「一郎先輩、そこまで言つて、やっぱり、ずるいっす」

大神神社に着いた四人は、参拝を済ませて改めて境内を眺めていた。

大神神社は、大きい。広いのではない。大きいのだ。

まず、ご神体が三輪山なので本殿がない。本殿のように見えるのは拝殿だ。三輪山には大物主大神が鎮まつていて、参拝客の信仰を集めた。三ツ鳥居が本殿としての役割を果たし、参拝客の信仰を集めてきた。

さらに大物主大神の化身とされる白蛇が棲んでいるとされる巳の神杉があり、熊野三山の神々を祀る神宝神社、第十代崇神天皇を祀る天皇社がある。その他にも万病に効くとされる薬水が湧き出る薬井戸があつたり、拝殿の他に十三の末社がある。

これほどの規模を持つ神社なのに、なぜ「神社」なのか。

伊勢神宮、石上神宮に代表されるように、全国に二四社ある神宮は、数ある神社の中で最も格式の高い神社という位置付けになつてゐる。大神神社がなぜ神宮ではないのか。記紀に対する一郎の疑問の一つがこういうところにも存在しているのだ。

「大神神社は、日本で一番古い神社なんです」

気がつけば、佐藤が水を得て話している。

「あらっ、出雲大社じゃないの？だって、古事記に出てくるじゃない。ほら、確か、因幡の白兔の大国主がアマテラスに国譲りをして、その時に作ったのが出雲大社じゃなかった？」

「それは確かにその通りなんですけど、実はその古事記に『出雲大國主の前は大物主大神（おおものぬしのおおかみ）が現れて、（出雲の）国造りを成功させるために自分にいきまつれ」と、この三輪山ですけれど、倭の青垣、東の山の上いきまつれ」と、この三輪山に祀りなさいと言つたと書かれてるんです。だから、大神神社のご神体はこの三輪山で、今日歩いてきた山の辺の道周辺の山々を青垣山つて余分です。出雲の大国主が国づくりをする前の話なので、大神社の方が出雲大社よりも古いと言ふことになるんです」

「ふうん、そうなんだ。知らなかったわ」

この様子を見ていた山本が、またソワソワし始めた。

「大物主と大国主は同じだと思ふよ」

山本は他人を決め込む。

「今度は何？大物主と大国主が同一人物だって？」

花子の口調がキツイ。

「それは、自分も聞き捨てならないっす」

神社と神様の話を黙って見逃すことは佐藤にはできない。

「いやいや、同一人物とは一言も言っていないよ。大物主と大国主は同じかもしれないって言ったんだ」

「何が違うんです？」

「大物主も、大国主も、固有名詞じゃなくて普通名詞だってこと」

「わかんないっす」

「意味不明」

同盟軍の結束は固い。

「これも藤原不比等と持統天皇の成功の一つだと思っただけど、大

国主って人の名前だと思ってるよね」

「思ってるっす」

「思ってるわよ」

「そこがトリックなんだ。大物主も、大国主も人の名前じゃない。

普通名詞の官名なんだ。つまり区長さん、ん？区長さんよりは大き

いか。東京二十三区の区長さんとか、市長さんのイメージ」

「大物主大神は人じゃないです。神様です。大神神社の中で大物主

大神さまを、そんな風に言っただけじゃないと思えます」

「わかった、わかった。悪かった。でも、ちゃんと交通整理をしな

いと気持ち悪いよね」

「すつきりしないっす」

「なんか、変なもの食べさせられたみたい」

「わかった。とりあえず、三輪そうめんを食べに行こう」

「一郎さんの奢りっすか」

「当然よね」

「だってさ、山本」

「！」

「なんで？いま、俺の名前を呼んだ？」

「呼んださ。三輪出身の山本くん。美味しい三輪そうめんのお店を

紹介してくださいまし。確か、山本ん家、そうめん屋さんだったよ

ね」

「え、ほんと？」

「マジ、すか」

「今更何を。はいはい、わかりましたよ。ご案内させていただきます

す」

四人は、大神神社の境内を抜けて、参道を大鳥居の方向に歩いて

いく。大鳥居を抜ければ、三輪の町につながる。山の辺の道は神社

境内の脇に繋がっている。大鳥居を通らずに境内に入ることに

なる。

大神神社の大鳥居には八咫鳥がいたこと、その様子を三輪山の上から見下ろす目があることに、四人が気がつくはずもなかった。

第二章 アラハバキ族、現る

いまを遡ること、五万年前。大陸から古代日本列島にわたってくる集団がいた。

アソベ族。古代シュメールに起源を持ち、大陸を渡ってようやく龍の国日本に辿り着いた。

ツボケ族

鉄と石の文化をもち

クナト王とアラハバキ

彼らはこれを一对の神として信仰し、